

# 考現学と日韓モダニズム文学

白 恵 俊

〔要旨〕本論議は、今和次郎の考現学と日韓モダニズム文学との関連様相を考察することが目的である。考現学の学際的側面は、社会学、建築学などの分野で論じられてきたが、文学との関係についてはまだ十分な研究が行われていない。考現学と文学との接点を当時のジャーナリズムを通じて探る同時に、当時の考現学の研究方法や記録方式が日韓モダニズム文学にどのように取り入れられ、どのような文学的効果をもたらしたのかについて検討する。

## 1. 今和次郎の朝鮮体験

今和次郎は3度に渡って朝鮮を訪れている。最初に朝鮮に渡ったのは、1922年9月から1ヶ月間で、今和次郎が34歳のときであった。訪朝の目的は、朝鮮総督府の委嘱によって京城から平壤、開城、威興、全州、金泉、慶州の順で朝鮮の住宅を調査するためであった。調査は、各地の「上流・中流・下流乃至貧民窟」の集落や住宅を、スケッチ・写真を用いて採集し、平面・立面・断面の実測や生活財調査、住居の構造分析、集落調査を中心に行われた。そして、その調査の成果として出版されたのが朝鮮総督府から刊行された『朝鮮部落調査特別報告第一冊（民家）』（1923年3月）であった。現在まで韓国建築史研究の基本資料として利用されている本報告書は、住宅の構造及び間取りとそれについての考察、内地人と交渉を持てる民家、という3章で構成されている<sup>1)</sup>。

二度目の訪朝は、1923年の春、満州建築協会・朝鮮建築会の共催による現地見学会に招聘されたときであった。当時、朝鮮建築会が主催した講演会の内容は『朝鮮と建築』（第二号、第四巻、1923年6月）に「総督府新庁舎は露骨すぎる」というタイトルで掲載されている。その一部を引用すると、「今日京城へ来てこのホテル（引用者註：朝鮮ホテルのこと）に泊まって一番驚いたのは、ホテルの中庭に取込んだあの朝鮮の建物ですね（引用者註：八角堂のこと（八角堂とは園丘壇に建てられた八角建物、皇穹宇のこと一再引用者））。去年は気も着きませんでした、これはホテルのプランニングとしては余りに露骨すぎて、被征服者を蹂躪するやうな一種の悲しみに打たれるのです。之と同一筆法で、去年感じたことですが、この頃じゃ総督府の考も変って居られませうが、総督府庁舎の一番先のプランニングが、何時までも朝

鮮民族に一種の悪感情を与えるやうに造るのではなからうかと思ひ、如何にも残念であるやうに感ぜられます。あれは寧ろ総督府庁舎としては其の場所の選定が誤って居るのだと思はれますから、取毀つことは一番宜いだろうと思はれますけれども、もうあれだけに出来上がったものですからさうも行きますまいから、何か社会事業の建築にでも使用することが理想的じゃありますまいか。社会事業の建築か若しくは其の他一般民衆の使用する建築として使用したい気がしますね。」と書かれている<sup>2)</sup>。当時の朝鮮建築会の会長が総督府庁舎の設計チームのリーダー格だった岩井長三郎であり、理事たちの殆どが総督府庁舎建設の関係者であったことを考えると今の発言は相当な勇気があったのではないかと思われる。さらに今は、その前の年に雑誌『改造』に総督府新庁舎の建設による光化門の撤去に痛烈な批判をして日本や朝鮮の社会に大きな反響を及ぼした柳宗悦<sup>3)</sup>を名指しながら、自分の主張を忌憚なく述べているのである。今和次郎のこの講演は、韓国の植民地期都市研究や朝鮮総督府研究分野では早くから注目されていた<sup>4)</sup>。もちろん、これらの研究は、共通的に今を総督府庁舎の建設に反対した単なる良心のある日本人知識人として取りあげているし、その後今の活動についてあまり検討されていない。しかし、今は、植民地政策の進行につれ、柳宗悦とは異なる微妙な立場に立たされるようになる。というのも、当時早稲田大学建築学科の教授であった今は、そのあと、朝鮮総督府や農商務省の委嘱によって朝鮮各地の視察はもちろん、植民地政策を含む国家次元の土地・住宅改善政策にも協力しなければならない状況に置かれていくからである。たとえば、今は1924年4月「生活改善同盟会」の調査委員になるが、この「生活改善同盟会」とは、1919年11月から翌1月にかけて東京教育博物館で開催された「生活改善展覧会」をきっかけに文部省主導で結成される団体である。東京帝大教授の佐野利器とともに今を委員にしたこの団体は、国民の生活状況の実施調査を行う一方、東京教育博物館における展覧会活動によって「生活改善」の眼による啓蒙を実践していた<sup>5)</sup>。しかし、実は住宅改良をはじめとした「生活改善」運動は、衛生と戸別調査によって住民を管理する都市行政と同じく、国民生活の向上よりも、国民秩序を安定させるために意図されていた。そういう側面から「生活改善同盟会」の委員としての今和次郎の活動を、「近代主義的」とであると批判する認識もある<sup>6)</sup>。もちろん、今が近代国民国家のイデオロギーにどれほど自覚的であったかに関しては、より綿密な考察が必要であると思われる。ただし、今和次郎が単なる近代主義的啓蒙主義者として収斂されない理由を彼の三度目の訪朝記録から確認することができる。

1944年9月、三度目の朝鮮訪問では、以前とは違って、知識人としての自覚と官僚としての責任感の狭間で葛藤する今和次郎を窺うことができる。三度目の訪朝の目的は、日本製鉄会社の土建協会の依頼で北海道や内地の炭鉱、製鉄工場などに朝鮮から連れてこられた朝鮮人労働者住宅の改善の方策を探ることにあった。具体的な依頼の内容は、民族の違いと互いの生活交渉の問題、朝鮮における朝鮮人の家屋の設計指針と民族性が着目の中心であり、それに気候、資材、慣習などという個々の条件で、現実の家屋はどう動きつつあるかを分析し、それぞれのあり方の方向を究めて、更に新たな総合にまでそれらを至らしめることが課題であった<sup>7)</sup>。す

なわち、今の訪朝は、朝鮮の人々が内地の住居空間に馴染めない原因を追求し、住居環境を改善するためであった。しかし、日本製鉄会社の究極的な目的は、朝鮮人の生活改善自体にあるのではなく、植民地政策の一環として、朝鮮人労働者による生産能率の向上にあったことは言うまでもない。

京城、清津、兼二甫の地域を約1ヶ月間にわたって調査した今は、特に仁川府富平白馬町の七百戸の純朝鮮風中庭スタイルの長屋建てを訪ねたあと、自分の心境を次のように書いている。

この住宅地こそ在来の半島の風習をそのまま持ち込んで生活出来るように計画された傑作ではないかと考えないわけには行かなかった。そしてその点で、昨日の新規な計画の住宅地の見学とちがった愉快さと美しさを当然感じたのである。造形の点からも、間取の点からも満点だったのである。いいかえるならば、習慣的な感覚に満足を与え、また習慣的な具体的な生活を何等の摩擦なしにとり行わせ得る舞台として、少しの阻誤もない事が痛感されたのである。しかし、そう感ずれば感ずる程、讚美したくなればなる程、持ち込まれている宿題との交渉がきびしくなる。考えさせられたのである。(中略)内地と朝鮮、それが二本建てで行かねばならぬ運命であるのか。いなそれは将来のものとしてはゆるされまい。しからばそのどこに折衷の道が発見出来ようか。造形的折衷において、間取の折衷において。若しもわたくし自身が、単純なる芸術家であるならば、また単純なる工学者であるならば、今日学んだ場面についての肯定も否定も単純に決定出来るのだろうか。朝鮮の人々の生活は今日以後どうあるならねば、という考えを尺度としなければならぬとき、それは決して単純には決定出来ないのだとのなやみをかかせられたのである。<sup>8)</sup> (今和次郎「朝鮮半島の労働者住宅を見る旅」、159頁)

この文章からは、「内地」と「朝鮮」、「芸術家」と「工学者」、そして「肯定」と「否定」との間に挟まれて躊躇している今の姿を読み取ることができる。終戦の約一年前、植民地政策がより一層厳しくなる時点で、政策を実行する側に属していた人間として、このような疑問や懐疑を抱き、それを書き残すことは容易ではなかったはずである。この調査記録は「朝鮮半島の労働者住宅を見る旅」として戦後すぐに出版された『働く人の家』(相模書房)に収録される予定でまとめられたが、「北九州八幡製鉄所の社宅を見る」の「朝鮮工具の管理」とともに未発表のまま今日に至っている<sup>9)</sup>。

今和次郎が嘆いた「内地と朝鮮、それが二本建てで行かねばならぬ運命」は、1945年の終戦によって逃れるようになった。そして、終戦以後今和次郎が朝鮮を訪れることはなかった。しかし、今が「内地と朝鮮」の「二本建て」を悩んでいた当時の朝鮮には、すでに日本の近代文化が相当流入されていて、考現学も今の意志とは関係なしに朝鮮の近代文化に影響を与えた。

今和次郎は1973年85歳で亡くなるまで、多様な方面にわたる研究に取り組んだこともあって、現在も今の業績は、現在まで建築学、社会学、民俗学など、各分野で積極的に行われてい

る。本論では、このような今和次郎の学際的な研究を視野に入れながら、日韓文学における考現学の関連様相を紹介する。文学と考現学との関連は、主に大正末期から昭和初期に文壇に登場した新感覚派、新興芸術派の作品から読み取ることができる。朝鮮の場合、日本のモダニズム文学に刺激を受けた九人会の作家たち、特に朴泰遠の作品が取り上げられる。それでは、考現学と文学との接点について考察することから始めたいと思う。

## 2. 考現学と文学の接点——ジャーナリズム

考現学を含めて今和次郎の業績は、長くて精力的な活動に比べ、あまり評価されなかったのが事実である。黒石いずみ氏は『「思想外」の思考——今和次郎論』で、今和次郎の業績に対する批判を三点に要約している。簡単に紹介してみると、第一、今の仕事の主観的な想像力に基づいていて、ほかの学者たちが検証できる客観性を持ってないし、歴史的な位置づけがわからないものについて文献的研究をしてその年代を把握する努力をしていないこと。第二、客観的で統一的な構造を持って関係づけられていないので、わかりにくいこと。第三、今の意図したのは、人々を導き、観察して調和的社會を復活させるためにコントロールすることであり、根源的には彼もまた権威主義的・啓蒙主義的だったという批判がそれである<sup>10)</sup>。さらに、今和次郎は、民間学者として見なされ、専門家より、多くの大衆を対象に文章を書いたため、随筆家であって学者ではないし、彼の研究には体系も方法もないとさえいわれたという<sup>11)</sup>。

しかし、学問として認められなかった今和次郎の研究は、1970年後半から1980年代前半に再評価され、今日に至っている<sup>12)</sup>。今和次郎の業績に対する批判のうち、「より多くの一般人々を対象に文章を書いたため」という指摘に注目しておきたい。今和次郎は学術誌に掲載される論文も同じ文体で書いたというが、特に考現学の場合、発表紙面が大衆向けの雑誌が多かった。最初、震災後の焼野を歩きながら単なる好奇心、趣味から始まって今和次郎の考現学が個人の次元を超えて一般大衆の前に登場できたのは、当時『婦人公論』の記者であった長嶋中雄作の後援があったからである。1925年5月、吉田謙吉らとともに銀座の街頭を観察した記録は、「1925年初夏東京銀座街風俗記録」というタイトルで『婦人公論』(1925年7月号)に掲載された。さらに、1927年10月15日から21日まで新宿紀伊国屋書店の開店記念として、「しらべもの(考現学)展覧会」を開催するようになるが、この展覧会は今をはじめとした開催側の方も驚くほど、多くの人で繁盛したという。吉田謙吉は、著書『考現学の誕生』で賑わった理由を「書店の階上をその会場としたことの廻り合わせのお蔭もあってか<sup>13)</sup>」と説明しているが、それよりも展覧会以前から『婦人公論』などのメディアが人々の興味をひく役割を果たしたからであった。というのも、「1925年初夏東京銀座街風俗記録」発表後5ヵ月経った12月の『婦人公論』には、今和次郎らによる「本所深川貧民窟付近風俗採集」が掲載されたし、次の年である1926年5月号にも「郊外風俗雑景」が発表されるなど、すでに今の作業は一般大衆に知られていたといえる。

『婦人公論』は、大正5年「我国唯一の高級婦人雑誌」というキャッチ・フレーズを掲げて創刊された婦人雑誌として、最初は主要読者が職業婦人と女学生などの知識層であったという。しかし、ほかの大衆指向の婦人雑誌に比べて、知識人指向の婦人雑誌は全般的に不振を究めたので、次第に『婦人公論』も「高級」路線の大幅な修正を余儀なくされ、大衆的な要素を取り込んでいくことになる。さらに、『婦人公論』の場合、女性だけでなく、男性読者が相当存在していて、大正期に『婦人公論』の記者を勤めた半澤成二によると、当時『婦人公論』の読者の三分の一以上が男性であったという<sup>14)</sup>。このように、今和次郎の仕事が『婦人公論』を通じて男女問わず一般大衆に知られたことは十分予測することができる。

1927年新宿紀伊国屋書店の展覧会を契機に考案された「考現学」という名称は、展覧会の成功<sup>15)</sup>以後出版された『モデルノロヂオ（考現学）』（1930年7月）によって広まるようになる。それについて今は「われわれの仕事の珍奇さ、また在来いわゆる文明批評という形式でいわれていたような一面を含むこと、そして非書齋的、非形式的にやっていること、等々のことが、ジャーナリズムにまず迎えられたといえるのである。考現学の知友をまずその方面に得た——『モデルノロヂオ』一冊を備えない新聞雑誌編集室がないといわれるほどだ（この点あるいは暴言多謝）。<sup>16)</sup>」と書いている。吉田謙吉も考現学とジャーナリズムとの関係について次のように回想している。

考古学に対向したい意識から始められた考現学は、しかし考古学があまりにその「ユーウツな科学」であるのに対してこれはまたあまりに朗らかで若々しい呼声とはなつた。だがその困難の度合を、考古学はその材料のあまりに少なく、考現学はあまりに材料の多きがため、と誰かが言ってくれた。その困難は、しかし、考現学第一書を世におくって以後、ジャーナリズムのレールの上を滑らす油ともなつたものの如くである<sup>17)</sup>。

『モデルノロヂオ（考現学）』は、1927年からいろんな雑誌に掲載されたものも含め、各々の採集記録を一冊に集めた形式で構成されている。発表された雑誌としては『婦人公論』以外にも『婦人之友』『サンデー毎日』『エレガント』『商店界』『不同調』『住宅』『アルト』などがあり、雑誌以外に『東京朝日新聞』にも掲載されていたことが確認される。この本は、初版を出してからまもなく再版を出すほど、人々に受け入れられた<sup>18)</sup>。装幀を担当した吉田謙吉は、『読売新聞』（1931年5月22日～23日連載）に当時のことを「第一書『モデルノロヂオ』をおくってからの反響は明らかに販路拡張のかたちとなつたが、諸モーダン尖端語辞典、各種新聞社年鑑中への考現学三文字の散見も之の一つだ」と書いている<sup>19)</sup>。このように、考現学はジャーナリズムとの共存によって広まっていくことができたし、考現学のテーマを雑誌社から依頼され、採集・記録していたことさえもあつた<sup>20)</sup>。「現代風俗或現代世相研究」を目的にする考現学の採集・分析の対象であつた当時の「現代人」たちは、考現学という学問をどう認識していたのか。吉田も言及した当時の「諸モーダン尖端語辞典」には次のように書かれてい

る<sup>21)</sup>。

①考現学 モデルノロジー (Moderonology) の日本語訳。かつてカリフォルニア大学の人類学教授クロイバーが五十余年の昔に遡って、女の裾を変遷的に研究発表したのが、同じ動機でこの人の考古学的立場に反し、今日の文明社会の近い変遷状態を研究するのが考現学である。現代社会のあらゆる分野にわたって、その流行変遷を組織的に研究するものである。コロンビア大学のニスとロム教授は静的な商品学に対して、動的な流行学の存在を提唱したが、これはいわばそれに等しい。日本では早大教授今和次郎氏等がこの方面の開拓者として知られている。(喜多壯一郎監修『モダン用語辞典』実業之日本社、1930年11月)

②考現学 モダノロジ。これは土器や人骨をいじくる骨董学ぢやア無い。スタキングのしわの寄り具合、ズロースの露出度、さては街を歩む女の裾のよじれ塩梅の統計から、露店の分布状態、デパートに吸い込まれる客の色分、恋人の散歩コース、サラリーマンと労働者のバットの吸い方等々を調査し、進んでは私娼窟の汚物分析まで敢行して、天晴れ現代人の偽らざる生活記録を作らうとする、正に100パーセントのモダン科学?である。(中山由五郎編『モダン語漫画辞典』洛陽書院、1932年1月)

上記の引用からもわかるように、考現学が話題になったことは確かであるが、学問としてはあまりにも誤解されていたことが確認できる。考現学がアメリカから輸入された学問として認識されていることに関しては、今和次郎も知っていて、『モデルノロヂオ (考現学)』の出版後約1年間海外に滞在するが、その期間中に自ら考現学に関する海外の状況を調べて<sup>22)</sup>、「余り正直にその因縁を告白すると、或は考現学そのものの金箔(?)がはげる、かも知れないのであるが、事実はしかたがない。くりかへして記すが、考現学とは私達が付けた名で、そして親切にその世界語訳 Modernologio をも私達が添付しておいたものなのである」<sup>23)</sup>と書いている。自分の研究が独自のものであることを堂々と云えず、「金箔(?)がはげる」と心配する今和次郎の言説からは西洋に対する当時の学問的コンプレックスを読み取ることができる。

一方、引用②からは考現学が本来の意図と目的とはかけ離れて単なる流行を追う作業として皮肉に語られていることがわかる。考現学とジャーナリズムとの頻繁な接触に原因があると考えられるが、昭和5年頃を堺に今と吉田が次第に考現学に携わらなくなっても、言葉は生き続け、ファッションや食べ物や流行といった世相風俗を語るジャーナリズム用語としてもっぱら用いられた<sup>24)</sup>。考現学はジャーナリズムによって登場され、大衆に親しまれたが、結局はまたジャーナリズムによって誤解されていくのである。

考現学とジャーナリズムとのこのような共謀関係は、文壇でも形成されていた。日本のモダニズム文学として位置づけられている新感覚派、新興芸術派の文学は、ジャーナリズムと密接な関係にあったし、今日まで評価されないことにおいても考現学と類似している。新興芸術派文学は、「新興芸術派倶楽部」の一員であった川端康成が『文芸時評』(1931年9月)で、「時

あたかもジャーナリズムの急速な発達に際会したためか、新興芸術派の作家ほどジャーナリズムに悪用されたことは、類を見ない<sup>25)</sup>と吐露するほど、反マルクス主義を標榜しながら芸術の自律性をとなえた最初の主張が次第に薄れ、結局は「エロ・グロ・ナンセンスのアメリカニズムの追隨に踊らされ、出版資本の道化た傀儡たらざるをえなかった<sup>26)</sup>とまで批判されるようになる。もちろん、考現学や新興芸術派文学の不評を単にジャーナリズムのせいにするには疑問が残るが、ここではジャーナリズムを背景に世に登場し、消えてしまった考現学と新興芸術派文学との関連様相に注目したいと思う。

まず、考現学と当時の文壇との直接的な関係は、今よりも吉田謙吉にあった。吉田は東京美術学校図案科に入学（1915年）して、服部之総や宇野浩二、広津和郎らと知り合いになり、築地小劇場の創立（1924年）には美術部宣伝部員委員として参加、その分裂後（1929年）は新築地劇団の同人になって、新感覚派当時の川端康成、横光利一、片岡鉄平との交流もあった。特に、川端康成とは『伊豆の踊子』の装幀を頼まれるなど、公私ともに信頼関係にあった。

吉田は二回に渡って当時の作家たちの仕事場である書齋を採集している。最初は1931年2月に『読売新聞』に掲載された「文壇諸家の書齋採集」として副題を「何百年（？）後にこの調べによりて1931年代の文壇諸家の書齋がほうふつされるものとして——」と付けている。この採集の対象になった作家は、新居格、大仏次郎、貴司山治、サトウ・ハチロー、川端康成、久保田万太郎、龍胆寺雄、吉屋信子の8人である。各作家の書齋は、天井から鳥瞰するような視線で内部を画いた平面図や机の上の小物まで細かく描いたスケッチに文章も添えられ、紹介されている。そして、その3年後である1934年『新潮』（3月、6月）にも「文壇考現学——作家の書齋を見る」というタイトルで連載されている。ここには、中河与一、白井喬二、山本有三、徳田秋声、江戸川乱歩、林芙美子の書齋はもちろん、6名の作家たちの住所まで明記されている。

吉田は「この調べのいみじき期待」について「プライバシーの節穴覗きに終らせたくない」といいながら、「一般的に現代生活に於ける個人所有物の処理法、常用帽子手袋の置き方、机の上にももの載っかり片、郵便物の処理等々」の情報を得ることにあると述べている<sup>27)</sup>。しかし、この記録が単に「現代生活に於ける個人所有物」の情報を得るためなら、必ずしも当時の有名作家である必要があったのかについては疑問が残る。実際、すべての作家が自分の仕事場の採集を歓迎したわけではない。『新潮』に自分の仕事場が公開された中河与一は吉田に不愉快な念を伝えたという<sup>28)</sup>。さらに、吉田が作家の家を訪ねたとき、女中から「訪問記事をお採りになるのですね」と言われていたことから、それが個人的な研究の目的ではなく、新聞社からの依頼による採集であることがわかる。これは、作品に止まらず、作家に向かうように大衆読者たちの欲望を掻き立て、満たすためにジャーナリズムが考現学を巧妙に利用していたことを意味する。

商業主義的なジャーナリズムに当時の文壇も振り回されていたことについては、すでに言及したが、このような状況を早い時点で最初に正面から取りあげたのは、広津和郎であった。

1930年『改造』(4月号)に広津が発表した『昭和初年のインテリ作家』は、その問題をかなり具体的かつ詳細に取組んでいる作品である。

「君、こなひだYに会ったら、或雑誌から、材料を向うから持って来、それで枚数と日限とを区切って小説を頼みに来たさうだよ。そして題までちゃんと付けてあるといふのだ。そしてYの言草が面白いよ。その方が結局楽で好いて。——併しこの形勢はだんだん強まるだけだと僕は思ふね。俺達の思ふがままに、俺達の思ふがままの材料を、俺達の思ふがままの時間をかけて書いていられた、などといふ時代は、遠く過ぎ去らうとしているんだね。——ああ、これもアメリカニズムのお蔭だ。」(中略)「ねえ君、プロレタリア派の人々に云はせると、目的意識で文学が変わって行きつつあるといふだらう。あれは併し、二重の意味でほんたうだよ。プロレタリアの目的意識と雑誌出版の大量生産的目的認識と——そして実際、雑誌が売らんがための目的意識は、思想からではなく、生活から作家の方向を変化させつつあるからね。——ああ、アメリカニズム！アメリカニズム！」

29)

このような文壇の状況を考慮すると、新興芸術派の作家たちの作品だけでなく、1930年代の小説テキストで見られる考現学の引用は必然的であったかもしれない。というのも、当時の考現学は、学問的な側面よりも、その視覚的な斬新さで話題になり、雑誌や新聞などの紙面を飾っていたし、その斬新さはジャーナリズムにとって売り物になれたはずである。そして、それを作家たちの「生活」を左右する出版社が作家たちに強要した可能性も全然排除することはできないからである。実際に、当時作家たちの作品からは、考現学の統計・分析記録の形式をそのまま取り入れているのを目撃することができる。

それでは、考現学の影響を受けたと読み取られるいくつかの作品を取り上げ、その様相をみることにしたい。

### 3. 考現学と日韓モダニズム文学

現在まで調べたところ、次のような作家たちの作品で考現学の記録方法が試みられていたことを確認することができた。主に、新感覚派もしくは、新興芸術派に属している作家を中心に調べたが、他にも多くの作家の作品から考現学の影響を探ることができると思う。

- ・ 新居育三「アメリカ」(『新青年』1931年、10、11月号)
- ・ 川端康成『浅草紅団』(先進社、1930年12月)
- ・ ささきふさ「ただ見る」(『モダン TOKIO 円舞曲』1930年)
- ・ 寺田寅彦「電車の混雑に就て」(『昭和文学全集3 寺田寅彦集』1956年)
- ・ 新居格「現代の三頁」(『近代生活』1929年、6月号)
- ・ 村山知義「スパイと踊る」(『改造』1929年、3月号)



「トラスト D・E」（『新選村山知義集』1931年）

・ 吉行エイスケ「女百貨店」（『近代生活』1930年2月号）

「享楽百貨店」（『モダン TOKIO 円舞曲』1930年）

「華やかな新宿について」（『改造』1931年1月）

・ 龍瞻寺雄「<sup>ペエヴメント</sup> 瓷路（ペエヴメント）スナップ——夜中から朝まで」（『モダン TOKIO 円舞曲』1930年）

各々のテキストは綿密な分析を通じて説明されなければならないが、それは今後の課題にしたい。まず、ここでは考現学的方法の採用における全体的な傾向を考察ことにする。これらのテキストでみられる考現学的技法は、主に視覚的効果のために取り入れられた傾向がある。たとえば、吉行エイスケの「女百貨店」には、女記者が主人公である太田ミサコに渡された名刺をみる場面が次のように描写されている。

仏国ポール商会代理店 太田ミサコ 日比谷街 36

と、記された花模様の名刺を太い手首に丸めこむと、彼女（女記者——引用者）は豚のように空中に跳ねた。<sup>30)</sup>

この場合、女記者が覗いている太田ミサコの名刺は、そのままテキストに写されることによって、まるで映画の一場面のように、読者は瞬時に多くの情報を得ることができる。これは、考現学でよく用いられた方法で、スケッチやデッサン、図表などを利用して状況を説明しようとする事と通じるといえる。考現学におけるスケッチやデッサンは、言葉だけではどうしても入りがちな記録者の主観から、読者の想像力を解放させる効果があるという。もちろん、スケッチやデッサンなどの視覚的装置に介入されている主観性も否定することはできないし、吉行エイスケを含めて当時の作家たちが考現学のように読者の想像力を配慮していたかどうかも定かではない。しかし、作家たちの意図がどうであれ、このような視覚性は既存の文学作品ではみることができない斬新さがあるということは事実であろう。

もうひとつ、考現学の影響がより直接的に浮び上がってくるテキストを紹介したいと思う。1929年『近代生活』（6月号）に掲載された新居格「現代の三頁」は、「1. 洋傘 2. 恋の二題 3. 第四次元の世界」の三つの短文で構成されていて、各々完結した物語になっている。考現学の記録形式をそのままテキストに入れている部分を引用してみると、次のようである。

Aは新宿駅の掲示板の前に立つ度毎にきつと立ち留って洋傘の遺拾物に気をつけるようにさえな

った。

お忘れもの

品目及び形状	数量	発見月日	発見場所
風呂敷	1	x 月 x 日	本屋
ボール箱	1	同上	同上
洋傘	同上	同上	同上
帽子	1	同上	同上
洋傘	2	同上	本屋広場
物指	1	同上	ホーム
袋入レーンコート	1	同上	本屋待合室
風呂式包	1	△月△日	電車内
煙草入	1	同上	列車内
書物	1	同上	本屋待合室
紙包	1	同上	ホーム待合室
眼鏡	1	同上	本屋待合室
ショール	1	同上	ホーム待合室 <sup>31)</sup>

「現代の三項」の場合も、登場人物 A が眺める「新宿駅の掲示板」の「洋傘の遺拾物」のリストは、考現学の採集記録形式をそのまま取り入れることによって、物語の流れとは関係なく、テキストの視覚的効果を狙っていると考えられる。より細かい分析が必要であろうが、考現学の採集記録方式は、主にテキストの装飾性にその役割を果たせられたとみられる。ほかに、計算書、新聞の記事や張り紙などをそのままテキストに写したりした作品も数多い。

実際、考現学は、『モダン辞書』などに載せられているような軽薄な「モダン? 科学」ではない。考現学の意義は、現代風俗<sup>32)</sup>の採集・記録に止まるのではなく、それらの分析を通じて人間を知ろうとすることにあった。『モデルノロヂオ (考現学)』や『考現学採集』に収録されている「考現学とは何か」「考現学総論」などの論文からは、考現学を体系的に理論化しようとする今和次郎の努力を読み取ることができる。にもかかわらず、考現学が単に流行を追う好事家的なものと誤解され、当時の知識人及び作家たちにも真剣に認識されなかった原因は、前述したように、ジャーナリズムとの関係にあった。同じく、考現学の表皮的な側面だけを創作の材料として取り入れて近代都市を表現した新興芸術派の作品が未だに評価されない理由も、ジャーナリズムとの関係で探ることができる。

そうであれば、ジャーナリズムとの関係を十分理解したうえで、考現学の学問としての意義、そして、新興芸術派の文学としての意義を考察することができたとき、両方の再評価の可能性も開かれるのではないかと思われる。

一方、考現学の視覚的効果だけではなく、学問的な指向を文学のテキストの中で実現しようとした作家がいる。韓国モダニズム文学の代表的な作家として賞賛されている朴泰遠 (1909

～1980）である。日本で考現学のブームが冷めつつ、今和次郎自分も考現学から生活学への展開を試みはじめた時期と擦れ違うように、朴の作品には考現学の影響が浮び上がってくる。ここからは、朴泰遠のテキストで考現学がどのように工夫され、表現されているのかを考察することにする。

朴は自分の文学における考現学について次のように述べている。

考えてみると作家としての自分の「想像力」というのは、確かにほかの人々に比べて貧弱なものであるらしい。私が一時「モデルノロジ」——考現学というのに熱中したのもいわば自分のこの「欠点、欠陥」を多少補うことができるのではないかということにすぎない。（中略）私は自分の努力に十分の一も、実際の作品の製作に活用することができなかった。いわば「勞而无功」であるが、とはいえ、単にそのまま作品に活用できなかっただけで、やはり自分も気づかないうちに得たことは決して少ないとはいえない。<sup>33)</sup>

朴泰遠は、法政大学予科に在籍（1929～1930）しながら、東京で生活していた。朴の考現学との接点をこの時期の東京留学からみる見解<sup>34)</sup>もあるし、たしかに1930年『考現学』の出版以後の考現学の流行を考えると十分予測できる。さらに、朴泰遠の文学傾向も東京留学の前後を比較してみると、作家として本格的な活動をした留学以後の作品に考現学の影響が顕著に現れている。

朴の文学における考現学は、最初は今と吉田の共著である『モデルノロジオ（考現学）』を直接引用したり<sup>35)</sup>、日本の作家たちと同じく、張り紙や新宿駅の告知板をそのままテキストに写したりする程度にすぎなかった。しかし、朴も「やはり自分も気づかないうちに得たことは決して少ないとはいえない」と告白しているように、考現学に基づいた創作方法は次代に独創性を持てるようになる。

1934年『朝鮮中央日報』（8月1日～9月1日）に連載された「小説家仇甫氏の一日」は、作家の分身である小説家仇甫が正午に家を出て、京城の街角を徘徊して夜中2時に家に帰る原点回帰の構造になっている作品である。この作品は、「考現学」という概念がテキストに直接登場する<sup>36)</sup>最初の作品であり、語り手である「仇甫氏」が朴泰遠自分であることを漂わせながら、自分の目にみえる風景、人物を観察し、素描するように書かれている。

朴泰遠文学における考現学の方法論に関しては、日本より韓国で先に議論されていて、金允植の見解が定説のように現在まで受け継がれている。金は、朴泰遠文学における考現学の受容を、単なる視覚効果としての記録採集の方式ではなく、朴の小説作法から見出している。確かに、金の指摘は考現学の研究態度まで理解したからこそ可能な斬新で鋭いものである。金の考察によると、小説作法としての考現学とは、ふたつの側面から考えられるという。まずひとつは、私生活を書くこと。もうひとつは、自分の私生活を小説化する過程のすべてを誰もが分かるように表に出す、この小説作法こそが考現学の方法論であるという。

しかし、ここでいくつかの疑問が残る。まず、金は考現学を「現代人の生活を組織的に調査・研究して現代の風俗を分析・解説する学問をいう<sup>37)</sup>」と定義しながら、それが日本の今和次郎らによる学問であることに關しては一切触れていない。まるで朴泰遠の独自のな方法論であるかのような言い方で誤解を招く恐れさえあるのである。そして、金は、朴泰遠は「小説の制作過程を見せ、それを小説として成立させる」ために、考現学的小説作法を取り入れているという。すなわち、朴にとって考現学は、自分の生活であれ、小説の制作過程であれ、「みせる」ための、暴露するための方法になるのである。したがって、自分という存在は徹底的に「見られる」対象として位置づけられてしまうのである。しかし、自分を「見せる」、「見られる」自分を描くという小説作法は、考現学より先に確立されている私小説の方法に近いのではないか。

ここで、考現学の「研究態度」に関する今和次郎の考えを確認しておきたい。

現代文化人の生活ぶり、その集団の表面に現われる世相風俗、現在のそれを分析考査するのに、その主体と客体との間に、すわなち、研究者と、被研究者との間に、あたかも未開人にたいする文明人のそれのように、患者にたいする医者のものであるように、あるいは犯罪者にたいする裁判官のものであるように、われわれ（調査者）が一般人のもつ習慣的な生活を離れて、常に客観的な立場で生活しているのであるという自覚がなかったならば、あまりに寂しいことのような気がするのだ（つまりかかるたぐいのはっきりした意識がないと、いわゆる役人式の調査になる）。それで、われわれは各自、習俗に関する限りのユートピア的なある観念を各自の精神のうちにもち、そして自分としての生活を築きながら、一方で世間の生活を観察する位置に立ちうるのだとの告白をしたくなるのである。その境地があればこそ、われわれと現代人とは油と水との関係に立ってわれわれは現代人のそれを客観することが可能となる。<sup>38)</sup>（下線——引用者）

考現学は、その研究の対象が何であるのかも重要であるが、その対象にどのような態度で接近していくのかに重点をおいた「方法の学」でもあった。そして、その方法とは「対象を客観的に観察する」という「見る」側の立場、視線の主体としての自覚を持たないと成立たないといえる。したがって、単に自分の生活や創作方法を風俗の記録のようにありのままみせる「小説家仇甫氏の一日」は、考現学が意識されてはいるものの、考現学的方法論について徹底的に追究した作品として読むには多少無理がある。日本の新興芸術派の作品から見られるような記録方法の表面的、模倣的な受容のレベルにとどまっているといえる。朴泰遠自らが告白していたように、自分の「貧弱」な「想像力」を「補う」ために、考現学をテキストに取り入れていたのである。しかし、朴の考現学の探求はこれで終わったのではなかった。

朴泰遠は、「小説家仇甫氏の一日」を発表した2年後、「川辺の風景」（『朝光』（1936年8～9号））を発表するが、この作品には考現学を通じて「自分も気づかないうちに得たこと」が形象化されている。「川辺の風景」には、心境小説とも定義された朴泰遠文学の私小説的な痕跡が全く見当たらず、考現学的小説作法がより進化した形で成立されている。ここでは、何

より「川辺の風景」から読み取られる考現学的視線に焦点をおきたいと思う。物語は、「清溪川」という川辺の閉ざされた空間を客観的に観察し、そこでの出来事を淡々と記録するような形式で展開されるのである。物語の登場人物として特定ではない語り手は、物語の舞台である「清溪川」を中心に集まったり、離れたりする複数の人物の様々な生き方を徹底的に「見る」立場から描いている。「川辺の風景」における考現学的視線についてはより綿密な分析が必要であると思われるが、考現学的視点とは、私小説的な視点でもなく、すべてを見下ろすような外部者として作家の視点でもない。対象との一定の距離を保つことによって、目に入るものに何の主観を持たず冷静に観察することこそ、考現学の視点であり、「川辺の風景」はこの考現学の視線について探求した作品である。川辺に住んでいる人々と一定に距離を持ちながら、彼らの生き方に何の価値判断も下さずに、淡々と書かれている小説作法によって、「川辺の風景」は既存の文学とは異なる斬新な作品として評価することができる。

「川辺の風景」をめぐるリアリズムとモダニズム論争は、韓国文学史においてよく知られているが、はたして、朴泰遠の「川辺の風景」はどちらに属されるといえるのであろう。考現学が学問とジャーナリズムとの間で宙吊りの状態であったように、考現学を追求して書かれた「川辺の風景」もリアリズムとモダニズムの間で宙吊りになっている作品として位置づけられるのではないか。

最後に、日韓モダニズム文学で見られる考現学の受容の差について考えることにする。日本国内の場合、考現学は学問的意義やその研究方法よりは採集対象である「現代風俗あるいは現代世相」にジャーナリズムの関心が偏って、作家たちも考現学を単なる流行としてしか認識できなかった。一方、朝鮮の場合、日本の近代文化がそのまま流入されたというものの、その流入には時差があったし、朝鮮文化との衝突もあって、ジャーナリズム、考現学、そして文学との関係が日本とは違う様相をみせる。たとえば、当時朝鮮のジャーナリズムは商業的な側面がなかったのではないが、日本政府の厳しい統制下で零細な資本で運営されていたので、大衆に迎合することはなかったし、文壇の場合もジャーナリズムと繋がりがあるとはいうものの、円本などが飛ぶように売れる出版資本市場が朝鮮にはなかったので、作家たちは貧困な生活を強いられながらも自分の文学を追及するしかなかった。従って、日本では大衆の興味を引くためだけに利用された考現学の場合も、朝鮮では知識人たち、作家たちによってより真剣に扱われていたといえる。このような傾向は、現在の日韓文学研究においても変わりがなく、日韓モダニズム文学における考現学の受容に関する研究も、考現学を誕生させた日本では行なわれておらず、むしろ韓国の研究者たちによって先に研究されていたことからわかる。

#### 参考文献

- 海野弘（1989）『モダン都市文学Ⅰ モダン東京案内』平凡社  
 大林信治・山中浩司（1999）『視覚と近代——観察空間の形成と変容』名古屋大学出版会  
 柿本昭人（1999）「牧人＝司祭としての今和次郎」『現代思想』第21巻7号

- 川添登 (2004) 『今和次郎——その考現学』 筑摩書房
- 金允植 (1989) 「考現学の方法論——朴泰遠を中心に」『韓国文学のリアリズムとモダニズム』 民音社 (ソウル)
- (1991) 『韓国現代モダニズム批評選集——資料編』 ソウル大学出版部 (ソウル)
- (1992) 『韓国現代文学思想史論』 一志社 (ソウル)
- 栗原敦ほか編 (1996) 『岩波講座 日本文学史第13巻 20世紀の文学2』 岩波書店
- 黒石いずみ (平成13年12月) 「今和次郎の「民家研究」と「朝鮮調査」」『青山学院女子短期大学紀要』 (第55輯)
- 黒石いずみ (2000) 『「建築外」の思考——今和次郎論』 ドメス出版
- 小菅健一 (1992年1月) 「<考現学>の方法——「事実」の「再現」としての修辞学——」『国文学—解釈と鑑賞』 第57巻1号
- 川添登 (2004) 『今和次郎』 筑摩書房
- 今和次郎・吉田謙吉 (1930) 『モデルノロヂオ「考現学」』 春陽堂 (同題名 学陽書房版 1986年)
- (1931) 『考現学採集(モデルノロヂオ)』 建設社 (同題名 学陽書房版 1986年)
- 今和次郎著、藤本照信編 (1987年1月) 『考現学入門』 筑摩書房
- 武田信明 (1995) 『<個室>とくまなざし>——菊富士ホテルから見る「大正」空間』 講談社メチエ
- 田中純 (2000年4月) 『都市表象分析I』 INAX 出版
- 崔恵實 (1992) 『韓国モダニズム小説研究』 民知社 (ソウル)
- 孫禎睦 (1996) 『日帝強占期都市社会相研究』 一志社 (ソウル)
- チョン・ジンソク (2005) 『言論朝鮮総督府』 コミュニケーションブックス (ソウル)
- 鄭賢淑編 (1995) 『朴泰遠 資料編』 セミ (ソウル)
- 富井正憲 (2001年5月) 「[朝鮮半島]今和次郎——朝鮮半島の旅」『月刊しにか』 大修館書店
- 永嶺重敏 (1997) 『雑誌と読者の近代』 日本エディタースクール出版部
- 藤森昭信 (1987) 『考現学入門——今和次郎』 筑摩書房
- 吉田謙吉 (1986) 『考現学の誕生』 筑摩書房
- 吉見俊哉 (1987) 『都市のドラマトウルギー』 弘文堂
- 吉行和子監修 (1998) 『吉行エイスケとその時代——モダン都市の光と影』 東京四季出版

## 注

- 1) 黒石いずみ (2001年12月) 「今和次郎の「民家研究」と「朝鮮調査」」『青山学院女子短期大学紀要』 参照
- 2) 富井正憲 (2001年5月) 「今和次郎——朝鮮半島の旅」『月刊しにか』 98頁からの再引用 大修館書店
- 3) 柳宗悦 (1922年9月号) 「失はれんとする朝鮮建築の為に」『改造』
- 4) 孫禎睦 (1996) 『日帝強占期都市社会相研究』 一志社・許英燮 (1996) 『朝鮮総督府、その庁舎建立の物語』 (ハンウル) を参照
- 5) 武田信明 (1995) 『<個室>とくまなざし>』 161～163頁 講談社
- 6) 柿本昭人 (1993年7月) 「牧人=司祭としての今和次郎」『現代思想』
- 7) 注2に同じ 99頁
- 8) 注2に同じ 100～101頁
- 9) 注2に同じ 101～102頁

- 10) 黒石いずみ（2000）『「思想外」の思考——今和次郎論』352頁 ドメス出版
- 11) 川添登（2004）『今和次郎』352頁 筑摩書房
- 12) 1971年には『今和次郎集』第1巻として『考現学』（ドメス出版）が刊行され、翌年、今を会長に日本生活学会が、76年には現代風俗研究会が設立されるなど、特に考現学を中心に積極的な活動や再評価が行われるようになる。
- 13) 吉田謙吉著・藤森照信編（1986）『吉田謙吉 Collection I 考現学の誕生』8頁 筑摩書房
- 14) 永嶺重敏（1997）『雑誌と読者の近代』193頁 日本エディタースクール出版部
- 15) 今和次郎は展覧会の成功に関して「その陳列図表の珍奇なのと、また展覧会そのものの名目すなわち考現学なる名目の新奇なることによって、おそらく一般の注目をうけたと思うのだが、まだそこでは漠然とした印象を一般に与えたといういでにすぎなかった」と謙遜していいながらも、「展覧会をみたという未知の人々から、その人たち自身でやられた調べものの報告をうけたりした」と書いている。（今和次郎著・藤森照信編（1987）『考現学入門』374頁 筑摩書房）
- 16) 注14に同じ 375頁
- 17) 注13に同じ 16頁
- 18) 戸塚文子は『「考現学」初版のころ』という文章で、『考現学』の初版について次のような感想を書いている。「当時、めずらしく、モダンな感じのする大判の本だった。「モボ・モガ」なんて言葉が、日常用語になった時代の感覚に、ぴったりであった。（中略）「考現学」という言葉を、知ったのも、その本によってであった。考古学に対し、おもしろい表現だと、強い印象を受けた。大判の、たしかコットン紙のような紙だったような気がする。」注2に同じ。4頁
- 19) 今和次郎・吉田謙吉（1930）『モデルノロジオ（考現学）』18頁 春陽社（同題名（1986）学陽書房社）
- 20) 今和次郎は「デパート風俗社会学」で「現代都市風俗を興味的に紹介する一つとして『デパートの中』といふ指定を編輯（婦人之友）の方から受けました」と書いている。注12に同じ 206頁
- 21) 佐藤健二（1986）「「考現学」の考古学」（『考現学採集（モデルノロジオ）』に所収）341頁 学陽書房
- 22) 今によると、欧州諸国はもちろん、アメリカの流行研究室まで『モデルノロジオ（考現学）』を持ち歩きながら、考現学という用語の存在や内容を確かめたという。
- 23) 注21に同じ 12頁
- 24) 注14に同じ 416頁
- 25) 野口富士男（1983年5月）「感觸的昭和文壇史 新感覚派から新興芸術派へ（下）」『文学界』412頁
- 26) 注14に同じ
- 27) 注19に同じ 340頁
- 28) これに対して吉田は自分の立場を次のように淡々と語っている。「その翌々日のこと、中河与一より来信「昨日は秘密の仕事部屋をのぞかれ」少からず面くらったとの事、のぞいただけならまだしも、とまれこうしてプライベートの扉のうちを無遠慮に展開する仕業はまことやその罪何に値するか知れぬ。然し、そうした場合にぶつかる度毎に、私の眼前にあらわれる対象に、無愛そうに接していく事なのである。だから、およそその対象に接して先ずキレイキタナイ等々の主観をすてかかって、ひたすら現代生活のいぶきを、無愛そうにモノクロムにしてしまう事でしかない。」注19に同じ 355頁
- 29) 野口富士男（1983年6月）「感觸的昭和文壇史 プロレタリア文学とその周辺」『文学界』249頁

- 30) 吉行エイスケ「女百貨店」(吉行和子・斎藤慎繭監修(1997)『吉行エイスケとその時代——モダン都市の光と影』所収 東京四季出版) 19頁
- 31) 新居格「現代の三項」(海野弘編(1989)『モダン都市文学Ⅰ モダン都市東京案内』所収) 392～393頁 平凡社
- 32) 考現学における「風俗」とは、通俗に使用されている意味ではなく、いかなる組織の社会の生活にも必然その社会生活体の表面的様相として現われる、サムシングをさしているという。(注14に同じ 176頁)
- 33) 朴泰遠(1938年1月26日)「擁老漫語」『朝鮮日報』
- 34) 李敬恩(1999)「植民地朝鮮文学の都市空間」(東京大学大学院総合文化研究科修士論文)
- 35) 朴泰遠「半年間」(『東亞日報』1933年6月15日～8月20日)(キプンセム(1991)『尹初試の上京』所収) 290頁 327頁 341頁
- 36) 朴泰遠「小説家仇甫氏の一日」((1995)『聖誕際外』所収 174頁 東亜出版社) 一部を引用すると次のようである。「街路で、人々は忙しく、いかにも用事がありそうな風情で往来する。仇甫は舗道の上に立ちつくして、ふと、自分の創作のためにどこか、例えば、西小門町の方面でも踏査しに行こうかと思う。というのも、長らく「モデルノロヂオ」(考現学)に取り組めなかったからだ。」
- 37) 金允植『韓国現代文学思想史論』54頁 一志社
- 38) 注19に同じ 363頁